入江一子

JOSHIBI no.180

天は私たちに正しく報いる。

やっと絵画の奥義がわかってきた。だからまだ死ねない——。そう言ってはばからない洋画家は、98歳を迎えた今も毎日絵筆を握る。シルクロードを描き続けて、すでに半世紀。2年後にはシルクロード作品を集結した百歳展を控える巨匠のあり方とは。

Photo 中川正子　Text 立古和智

親の仕事の関係で、多感な時期を韓国のテグで過ごした私が女子美に進むのは、当時、並大抵の話ではありませんでした。第一に、ひとりで日本に渡ることすら初めて。ですから女学校時代に朝鮮美術展覧会で入選することで、周囲から女子美行きを納得してもらったほどです。有名な作家を輩出していた女子美は、本当に憧れでした。女性が絵を学ぶ最高峰の学校でしたから。とはいえ画家になろうというよりは「一生懸命に良い絵を描きたい」の一心でした。学校での課題に飽き足らず、週末や長期休暇には好きな風景に足を運んで描いていたほどです。私は小学生の頃から使命のように「一日一枚」を続けてきましたが、振り返ってみると絵描きになろうと思ったこと

は一度もなく、描き続けるうちに自然と絵描きになっていたような気がします。

女子美卒業後は、縁あって37年間に渡り林武画伯に師事しました。林先生から学んだことは「芸術至上主義」という生き方です。優れた絵を描く。それが林先生の人生における第一義です。大きな絵だろうと、小さな絵だろうと、先生はいつも死に物狂いでした。描いては消し、消しては描く。それを納得いくまで繰り返します。その生き様は絵にも現れます。だからこそ人の心を打つのです。売ることを目的に描かないのも先生らしいところでした。私もその精神を受け継いできたつもりです。ですが展覧会では、ありがたいことに買っていただけます(笑)。逆に売ろうと思いながら描いていたら売れなかったでしょう。私は美術の教員を定年まで務めたのですが、絵のほかに生活の糧があったおかげで採算を考えずに描いてこられたのは良かったですね。

シルクロードの旅も、教員の長期休暇を利用して毎年行くようになりました。最初は1969年に東南アジアへ。84歳でモンゴルに行った2000年までに、30カ国余りを訪れました。ちなみに周りの反対を押し切ってニューヨークで個展を開催したのは93歳のときです。私には「もう何歳だからやめておこう」という遠慮はありません。その勢いは若い頃からのものです。女子美を卒業した直後に、女学校の校長から「ハルピン、チチハルで個展をしないか」と誘われたときには、言葉もわからない異国で、電車の乗り継ぎを間違え、四苦八苦しながらも開催地までこぎつけました。校長の奥様は「言う人も言う人だけど、やる人もやる人よ」と呆れていましたね。それを思えばニューヨークでの個展くらい何でもありません。「反対されてもやる」と動き出せば、色んな人が力を貸してくれて、ことはうまく運びます。不思議なくらいにね。

やっぱり私は「天は正しい」と思うのです。怠けていたら誰も応援しないけれど、懸命に働く人は必ず報われる。シルクロードの旅でも幾度となく危険な目に遭いましたが、それでも生き延びている。これも天のおかげでしょう。天は見ています。そう信じています。実のところ、この歳まで生かされてきて、ようやく絵画の奥義が見えてきました。だから今すごく描きたいのです。まだまだ死にたくありません。描いていると元気がわいてきますし、一番楽しいのはやっぱり美しい色を塗っているとき。かつて中国のノンコウの川面が夕日で真っ赤に染まった風景と出会って以来、私にとってのシルクロードの旅は、この夕陽の色を求めるために続いたようなものです。あのときに目にした言葉にはできない色彩は脳裏に焼き付いています。あれこそが原点。イスタンブール・ボスポラス湾の朝焼け、シリア・パルミラの夕陽。いずれも圧倒的な光でしたが、こうした色彩を目にすることで、ノンコウの美しさを追い求めてきたような気がします。

生きている限り、私は描き続けます。女子美のみなさんにも、同じく続けることで美的な人生を送ってほしいですね。100歳の私は、上野の森美術館で全シルクロード作品を発表しますが、それを終えたら次は105歳。100歳は単なる関所です。105歳で何をするのかは未定ですが、百歳展を終えたら、また何かを新しく始めるつもりです。

入江一子(いりえ・かずこ)

1916年、山口県出身。多感な少女時代を韓国大邱(テグ)で過ごす。1938年女子美術専門学校師範学科西洋画部(現・女子美術大学)卒業。同年、林武画伯に師事。1947年、女流画家協会創立会員。1957年、独立美術協会会員。1969年よりシルクロード写生旅行を開始。2000年、入江一子シルクロード記念館オープン。2009年、ニューヨークで個展「シルクロード色彩自在」開催。http://iriekazuko.com/

女子美祭２０１４

10月24日～26日の三日間、杉並、相模原の両キャンパスで女子美祭が開催されました。２０１４年の女子美祭は晴天に恵まれ、気持ちの良い秋晴れ。フリーマーケットをはじめとする屋外の模擬店や、野外ステージの催事も大いに盛り上がりました。館内に配置された各専攻、表現領域の学生による作品展示や、学生によるワークショップや自作グッズの展示販売会場も大盛況。

杉並キャンパスでは作家、映画監督、ディレクターなど多彩に活動をされている大宮エリーさんの講演会、声優のうえだゆうじさんのトークショーを開催。相模原キャンパスでは、俳優の伊勢大貴さんスペシャルステージ、ラーメンズの片桐仁さんや人形作家の吉田良さんの講演会が開催され、在学生のみならず来場者の方で各会場は大変賑わっていました。

100周年記念大村文子基金

本基金は創立１００周年記念事業の一環として、２０１２年に大村理事長夫妻からの寄付を基に設立されました。本基金の目的（※）のために功績のあった者、および団体に各賞が贈られ、本年は以下の方々に授与されました。また、今年から新たに「韮崎大村美術館賞」が新設されました。

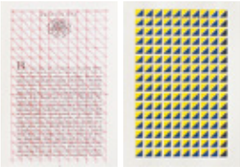
（※本基金は卒業生・在校生の制作・研究など芸術活動の奨励、アーティストおよび研究者の育成を主な目的としています。

平成27年度 第16回

女子美パリ賞

［パリ国際芸術都市アトリエ利用権］
［副賞 100万円］

音羽晴佳
平成21年　短期大学部 造形学科 卒業
平成23年　芸術学部 絵画学科 洋画専攻 卒業



『包むように遮って、
守るように、静かに閉じ込める。』

平成27年度 第9回

女子美ミラノ賞

［大学借上げマンション1年間貸与］
［副賞 100万円］

小林麻美
平成16年　芸術学部 デザイン学科
造形計画専攻 卒業

『House K』

平成26年度 第14回

女子美 制作・研究奨励賞［副賞 各20万円］

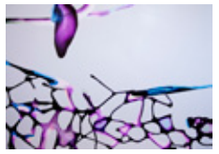
海老原嘉子
昭和36年　芸術学部
美術学科 工芸科 卒業

『1950年以降で海外の美術館に
パーマネント・コレクションされた
日本のデザインの研究』

角谷沙奈美
平成15年　短期大学部 造形学科 卒業
平成17年　芸術学部 絵画学科
洋画専攻卒業
平成19年　大学院 美術研究科 美術専攻
修士課程 洋画研究領域 修了

『どこにいても、なにをしていても』
Oil on canvas/72.5×91cm/2013年

宮木沙知子
平成22年　芸術学部 絵画学科
洋画専攻 卒業
平成24年　大学院 美術研究科
美術専攻 修士課程 洋画研究領域 修了



『空間樹』
パネルにアクリル
59.4×84.1cm/2014年

平成26年度 第1回

韮崎大村美術館賞

［副賞 記念品］(韮崎大村美術館での作品展示)

石井文音
平成24年
芸術学部 立体
アート学科 卒業
平成26年
大学院 美術研究
科 美術専攻 修士
課程 立体芸術研
究領域 修了

『Systematic』
鉄/160.0×90.0×90.0cm

平成26年度 第13回

女子美美術奨励賞（留学生対象）［副賞 各10万円］

金 智圓（きむ じうぉん）
芸術学部
美術学科 立体アート専攻
4年次在籍

『繋がり』
繊維/W170XL100XH230cm/2014年

金 知炫（きむ じひょん）
芸術学部
アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
3年次在籍

『PROJECT_HITO ver.感じる心臓』

曺 英恩（ちょ よんうん）
造形学科
デザインコース
2年次在籍

『ルージュディオール ディスプレイ』

平成26年度

大村特別賞［副賞 記念品］

愉鳴呼社（ゆああしゃ）

選考理由：愉鳴呼社の結成は、5年前付属高校在籍時に自発的に行われたもので、女子美術大学に在籍する学生9名からなるグループです。学外のイベント、展示に積極的に参加し、高く活動を評価されています。特に2012年のGEISAIでグランプリを獲得したことにより、広く認知されるようになりました。その表現が自由闊達な女子美のイメージの形成にも大きく寄与していることが評価されました。

女子美よさこい実行委員会

選考理由：「女子美よさこい」は、2010年、女子美術大学同窓会高知支部により、大学創立110周年を記念した支部活動として企画され、同窓会を中心とした有志により運営されています。教職員、同窓生とその親族のチーム編成は「オール女子美」を表現する活動であり、その連携により品格あるエネルギッシュな女子美力を社会に広くアピールしていることが評価されました。

女子美生が考える「東京オリンピック 2020」をプレゼン

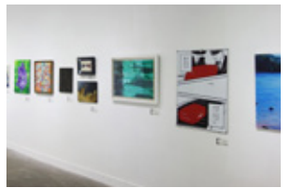
10月24日、相模原キャンパスにて、ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の仲條正義先生と奥村靫正先生による特別講義が開催されました。受講者は、事前に用意された課題を完成させてこの場に臨みます。今回の課題は『東京オリンピック2020』。受講者は、「オリンピックロゴ」「アイキャッチャー」「開会式案」の3案を制作しました。まずは「オリンピックロゴ」「アイキャッチャー」の講評からスタート。仲條先生、奥村先生は、学生の作品を丁寧に観ながら、時に制作者としての厳しい言葉で指導する場面も。その言葉には学生も息をのむように聞き入ります。「開会式案」のグループプレゼンテーションでは緊張感のある空気から一変、世界文化遺産に指定となった「和食」をイメージし、海外でも人気の高い「鮨」をモチーフにした企画の発表は、創意工夫がこらされ、会場はおおいに盛り上がりました。仲條先生、奥村先生も、丁寧に作られた企画資料を大絶賛。プレゼンテーション終了後には仲條賞と奥村賞が発表され、2014年の特別講義の幕を閉じました。

ミラノ・トリエンナーレの魅力とは？ マーラ・セルベット客員教授、特別講演会で語る

10月20日、相模原キャンパスで客員教授マーラ・セルベット先生の特別講演会が開催されました。もともと建築家としてイタリアで活躍中のセルベット先生。その活躍は建築分野にとどまらず、インテリアやエキシビジョンなど多岐にわたり世界でも屈指のクリエイターです。今回の講演会は、ミラノ・トリエンナーレで手掛けられた『TRAME』展の映像を観賞し、客員教授の佐藤和子先生と対談形式で進められました。『TRAME』展のために制作した銅繊維によるリング状のタワシをじっと観察し「こんなに美しいのならブレスレットにしてもおかしくないわ」とおふたりで笑いあうシーンも。本学は4月にミラノでの海外インターンシップを実施。選抜学生がセルベット先生の事務所でワークショップに参加していることもあり、女子美生たちはおふたりの対談に真剣に耳を傾けていました。

ジョシビを世界に発信する　Joshibi Art Gallery

２０１４年夏、新たなる試みとして「上海Love Story」企画が始動したJoshibi Art Gallery。同年秋には本学卒業生で美術作家の秋山さやか氏の展覧会が開催されました。この展覧会は制作と公開が同時進行、つまり作品と会場は日々刻々と姿形を変える、ライブペインティングならぬライブクリエイション。秋山氏は訪れた土地と自分との関係性を地図上などに針と糸を使って綴る作家ですが、今回の上海では、1ヶ月の滞在制作の中から、新たなこころみとなる作品を生み出しました。



２０１２年に協定を締結し、交流を深めている中国・上海交通大学。教員同士の交流展を２０１３年より開始していて、２０１４年は上海交通大学で開催、そしてその交流展がJoshibi Art Galleryへと巡回展として開催されました。本学からは上葛明広大学院研究科長、橋本弘安学部長ら21名が出品、上海交通大学から詹仁左先生、吳一平先生、王琦先生らの作品が出品されました。ギャラリーを訪れた多くの方が各教員の作品を見入っていました。

Joshibi Art Gallery

展覧会報告

秋山さやか「もずのはや贄」展

2014年10月25日[土] ～ 11月26日[水]
※会期延長しました

本学卒業生の秋山さやか氏（広報誌JOSHIBI No.178表紙、巻頭インタビュー）による展覧会。

第三回 百年丹青緣展

2014年12月2日[火] ～ 12月23日[火]

本学教員と中国・上海交通大学教員との交流展。油絵、版画、日本画、水墨画などを展示。

展覧会予告

女子美術大学×中国伝媒大学
学生交流写真展

2015年1月17日[土] ～ 2月8日[日]

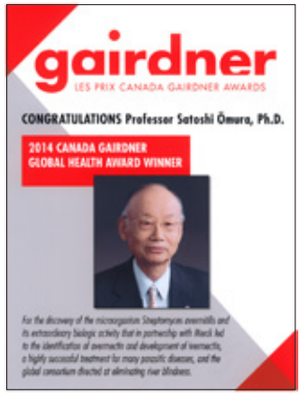
本学学生と中国伝媒大学学生との交流写真展。本学芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域川口吾妻教授監修。

医療が求める新分野、メディカル・イラストレーションを体験

10月10日、17日と相模原キャンパスで開催された「メディカル・イラストレーション ワークショップ」。本学卒業生で、現在美術解剖学の第一人者として活躍中の宮永美千代先生を講師に迎え、北里大学病院形成外科の秋本峰克先生と兵頭徹也先生、本学洋画専攻教授 熊谷宗一先生の協力のもと行われました。プログラムには洋画専攻、ヴィジュアルデザイン専攻、メディア表現領域から20名の女子美生が参加。静物デッサンとは違うアプローチのやり方に、最初はとまどっていた学生達もアドバイスを受けるうちに、積極的に。ワークショップ終盤には、4名の先生方による講評会を実施。「このクォリティならば学会資料として使用可」との評価をいただく作品もあり、新しい分野に対して、確かな手ごたえを得たワークショップとなりました。

大村智理事長「ガードナー国際保健賞２０１４」受賞

大村智理事長が、発展途上国の医療・衛生問題の改善に貢献した研究者に贈られるカナダの「ガードナー国際保健賞２０１４」を受賞しました。受賞理由は、「微生物 Streptomyces avermitilis を見出し、メルク社との共同研究によりその生産物である類い稀な生物活性物質エバーメクチンを発見してイベルメクチンの開発へと導き、多くの寄生虫症の治療に成功し、世界的共同体（WHO,World Bank etc.）を河川盲目症の撲滅へと導いた」であり、毎年数億人の人々を救っていることが評価されました。同賞は２００９年に創設以来、大村理事長が日本人として初めての受賞となりました。受賞に関わる記念講演会は、オタワ大学をはじめ５回行われ、授賞式は10月30日、ロイヤルオンタリオ博物館で執り行われ、同日夕刻に開かれたＶＩＰレセプションには、受賞者のほか、各国の研究者、政府高官など約６００名余が招かれました。



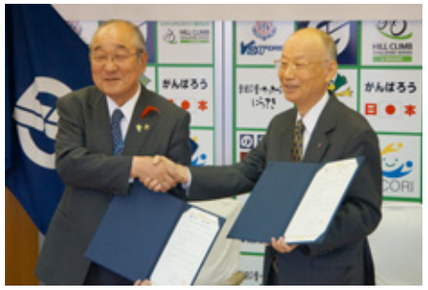
NEWS & TOPICS

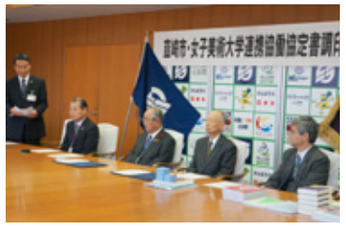
01 イラストレーターを目指す女子美生へ特別講演会開催

イラストレーター、ミュージシャンとして活躍されている中村佑介さんの講演会が11月19日、相模原キャンパスで開催されました。本学での講演会はこれで3度目。今回も立ち見が出るほど多くの学生が駆けつけました。CDジャケットをはじめ、小説本の表紙のイラストも手掛けている中村さん。カラーはもちろん帯に隠れる部分との調和を考えるなど、イラストレーションへのこだわりには聴講していた学生達も思わずため息をついてしまうほど。後半にはイラストレーターを目指す学生のために講評会を実施。厳しいコメントの中にも確実なアドバイスをしてくださり、これからの制作の糧になったことでしょう。終演後にはなんと原画の展示と来場者全員にステーショナリーブックのプレゼントが。2時間半にも及ぶ濃厚な講演会は、熱気が冷めることなく終了しました。

02 名誉教授 津田裕子先生が文部科学大臣賞を受賞

本学名誉教授の津田裕子先生の作品『王と王妃』が、第99回二科展彫刻部の文部科学大臣賞を受賞しました。津田先生は、本学付属高等学校から短期大学部の彫塑教室を卒業。1977年に二科展に初出展、同時に特選を受賞して以来、二科展を中心に精力的に活動を続けられています。受賞作品は、国立新美術館で9月3日～14日まで開催された二科展で展示されました。





03

韮崎市との連携協働に関する協定締結

11月7日、韮崎市と女子美術大学との連携協働に関する協定書調印式が同市役所庁議室にて執り行われました。同市から横内公明市長をはじめ水川勉副市長や矢巻令一教育長が出席、本学は大村智理事長、横山勝樹学長、五十嵐義明常務理事らが出席。これまで同市と本学では、2008年に締結した韮崎大村美術館との相互協力協定をもとに、美術品の相互活用など交流を深めてきました。このたび韮崎市制施行60周年を機に、これまでの協力関係を更に発展させ、教育・文化の振興・発展、人材育成、まちづくり、産業振興等、広い視野にたって連携協働を推進すべく協定の締結が実現することとなりました。

※各氏の肩書きは締結当時のものです

04

相模原市との包括連携に関する協定締結

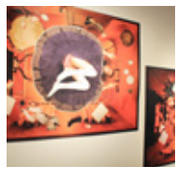
11月18日、相模原市と女子美術大学との包括連携に関する協定書調印式が、同市役所本庁舎特別会議室にて執り行われました。同市から加山俊夫市長をはじめ小池裕昭副市長や森多可示市民局長が出席され、本学からは大村智理事長、五十嵐義明常務理事らが出席しました。
これまで同市と本学では、2001年に締結した文化促進協定に基づき、本学の女子美アートミュージアムが相模原市民にとって広く芸術に親しめる拠点となるべく各種事業を展開してきました。このたび新たに締結した包括連携に関する協定は、様々な分野における協力関係を包括的・継続的な連携に発展させ、協働を基調としたまちづくりを推進することを目的としています。教育・文化、人材育成、健康・福祉、環境保全、まちづくり、産業振興、防災等、幅広く連携を図っていきます。なお同日、同会場にて相模原市と、青山学院大学、麻布大学、桜美林大学、和泉短期大学とがそれぞれ同様の協定を締結しました。

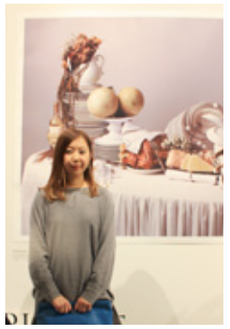
05

柚木沙弥郎名誉教授、パリと盛岡で展覧会 シンプル×ユーモラスな型染め作品への期待と評価高まる

1987～1991年まで本学学長を務められた柚木沙弥郎先生。日本を代表する染色家として92歳の現在も作品を発表し続けています。伝統を踏まえながらも高いデザイン性を持つその工芸美は、世界一のアジア・オリエンタルコレクションを誇る仏国立ギメ東洋美術館に認められ、2014年夏、当美術館での展覧会『色彩の舞い 柚木沙弥郎展』が開催されました。展覧会ではギメ美術館に収蔵された多数の作品の中からよりすぐりのものを出展。また、同年晩秋からは岩手県立美術館で展覧会『いのちの旗じるし 柚木沙弥郎展』がスタート。この展覧会は東日本大震災後、柚木先生が逆境の中を命がけで闘う人々へのエールをテーマとして制作してきたシリーズ作品を中心に展開したものです。今回の特別展示は4月19日まで、柚木先生より寄贈された同シリーズの型染布に加えて最新作も展示されています。

（上段）ギメ東洋美術館展示風景
（下段）岩手県立美術館展示風景 撮影：大谷広樹





06

『吉田ユニ展“IMAGINATOMY”』開催

卒業生であり、アートディレクターである吉田ユニさんによる自身初となる個展『吉田ユニ展 “IMAGINATOMY”』が、ラフォーレミュージアム原宿で開催されました。付属中学から大学までの10年間を女子美で過ごしたユニさん。卒業後はアートディレクター大貫卓也さんと本学卒業生である野田凪さんに師事し、2007年に独立。同年に手掛けた香港のファッションブランド「b+ab」のビジュアルを始め、これまで手掛けた作品を一度に見ることができる展示となりました。なかでも普段見ることのできないラフスケッチや、メイキング映像からはアナログの制作にこだわるユニさんの意欲や熱意が伝わり、多くの来場者が足を止め見入っていました。また、今回の展示に合わせて初の作品集を発売。今後もユニさんがつくり出していく世界から目が離せません。

07

女子美生が就活生のための
メイクサンプルを提案

女子美では、2013年よりプロダクトデザイン専攻 松本博子教授の指導のもと、株式会社DHCとの産学連携に取り組んでいます。DHCは、女子美からの提案「メイク初心者のための就活メイクキット」を高評価。この結果を受け2014年今季、就活生に無料配布する「メイクサンプル」を企画することとなりました。企画を立ち上げるにあたり、女子美でも学科・専攻を超えた3年生によるプロジェクトチームを編成。まさに就活を目前に控えた女子美生によるチームが「自分がほしいと思うメイクサンプル」のデザインに取り組みました。女子美生デザインの「メイクサンプル」は女子美祭2014の相模原キャンパスで無料配布され、手にした来場者の方々から「かわいい！」と大好評でした。

08

インドネシアジョグジャカルタ芸術大学と
学術交流協定を締結

インドネシアのジャワ島中部の古都ジョグジャカルタ市にあるインドネシアジョグジャカルタ芸術大学 Institu Seni Indonesia Yogyakarta（ISI）は、独立後の1984年に創設され、美術学部、舞台芸術学部、メディアアート学部から成る同国を代表する国立芸術大学です。このたび、本学から小林信恵短期大学部部長が訪問、ISIと本学は11月25日に学術交流協定を締結いたしました。両校は「日本・インドネシアにおける『ものづくり』を通した芸術文化と人材交流プロジェクト」(※)について共同授業をとおして推進していくことに合意。初回授業はISIにて、本学芸術学部デザイン・工芸学科長であり、プロダクトデザイン専攻田村俊明教授によるプロダクトデザインの講義を行いました。
(※本事業は、国際交流基金のアジア・市民交流助成を受けています。)

09

女子美生が魅せる「雫」
TOKYO DESIGNERS WEEKに出品

10月25日〜11月3日の10日間にわたり開催された、日本最大級のクリエイティブイベントTOKYO DESIGNERS WEEK。今年もデザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻から有志19名が参加をして、ASIA AWARDSに「雫の道」を展示しました。繭のような白いドーム、中心部には光が差し込み、空から雫が零れ落ちるように一糸一糸煌く空間演出が施された作品。来場者も「雫の道」を笑顔で通り抜けていました。

10

直接会うこと、目を見て話すことで意識がかわる
女子美生、義援金を福島の高校へ届ける

2011年より洋画専攻研究室が開催してきた「東日本大震災被災者支援チャリティー展」。教員と大学院生、修了生によって運営してきたものを、2014年からは大学院生が主体となって継続していくことに。第4回目となるチャリティー展は、展示とぼろ市の二本立てで、相模原キャンパスにて開催しました。7月16日から21日にかけて5日間の開催中に集まった金額は47万1691円。この義援金は、福島県の相双地区高等美術連盟に贈呈することに決定。相双地区では美術教育費用が減少しており、厳しい状況が続いているとのこと。ぜひ義援金を使っていただこうと、連盟代表校である原町高等学校に直接お届けすることになりました。現地では美術部のみなさんと交流会を開催。高校生とのふれあいは女子美生にも大きな経験となりました。同研究室では、これからもさまざまなかたちでチャリティー展などの企画を進めていく予定です。

（左）HIROSHIMA 2014 公式ポスター（右）ハンガリー展 会場風景

11

第15回広島国際アニメーションフェスティバル、開催

本学同窓会長木下小夜子氏が創設し、フェスティバルディレクターを務める第15回広島国際アニメーションフェスティバル HIROSHIMA 2014が、8月21日〜25日、広島市にて開催されました。期間中はアニメーション作品の上映やコンペティションの公開審査が行われ、最終日はコンペティションの表彰式と受賞作品の上映が行われました。本学は、アニメーション制作を志す学生や教育機関の作品発表の場である「エデュケーショナル・フィルム・マーケット」にブースを出展。芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域の学生作品を上映しました。21日に行われたオープニングパーティーには、国際名誉会長であるブルーノ・ボツェット氏、女子美卒業生のアニメーション作家湯崎夫沙子さん、本学から横山勝樹学長、メディア表現領域羽太謙一教授らが参加しました。

12

ICAF2014（アイカフ）

12回目を迎えたアニメーション制作をしている学生たちのための作品上映会、ICAF2014。女子美術大学がフェスティバルディレクター校をつとめ、シンポジウムおよび展示には「コマドリ女子」を特集として企画、卒業生の越後谷みゆきさんのフェルト作品をメインビジュアルとして開催されました。東京大会では、9月25日から28日まで国立新美術館において、国内21校、海外3校から推薦された学生アニメーション作品176点を上映。また、北海道で11月3日、金沢で11月8日から14日、京都で11月28日から30日、名古屋では12月6日と各地で上映会が開催され、多数の観客を集めました。

13

第8回
こどもアニメーションフェスティバル

こどもとアニメーションをテーマにした第8回こどもアニメーションフェスティバルが、女子美祭期間中の10月26日、杉並キャンパスにて開催されました。このアニメーションフェスティバルでは、こどもたちに見せたいアニメーション20作品と、こどもたちが作ったアニメーション3作品を上映し、アニメーション作家の古川タクさん、ひこねのりおさん、鋤柄真紀子さんの審査によって選ばれた優秀作品への授賞式も行いました。また、「フェルトと毛糸でつくる☆ふわもこキャラクターアニメーション」というこどもたちがその場でコマ撮りアニメーションを制作するワークショップも実施し、たくさんのこども達が個性豊かなキャラクターを作り上げ、アニメーション制作を楽しみました。

14

高円寺純情商店街に
高円寺チャレンジショップがオープン！

11月、高円寺純情商店街にショップがオープンしました。これは山形県飯豊町、高円寺純情商店街、本学メディア表現領域3年生が共同で行っている取り組み。アートとデザインの力で飯豊町をPRするという目的で、町の特産物を販売する店舗を出店しました。学生たちは店舗の企画から設営まで行い、屋内にはオリジナルポスター、屋外にはタペストリーの展示をしました。オープン前に行われた内覧会では、山形県飯豊町長の後藤幸平氏、高円寺銀座商店会協同組合理事長の久保田潤一氏、本学より横山勝樹学長、メディア表現領域羽太謙一教授が出席、おにぎりやお漬物、芋煮などがふるまわれました。学生達からは「準備が大変だったけれど、お客様が喜んでくれたので嬉しい」との声が寄せられました。

18 b・tanぬぐい プロジェクトによる ワークショップを開催！

b・tanぬぐいプロジェクトは、ちょっとした染や織ムラで製品にならなかった伝統染色注染のB反手拭やゆかたを、女子美生のセンスを加えて新たな形にしてよみがえらせて製品化する活動を全学科の有志学生で行っています。女子美祭2014では、手拭を裂いて作った「びいたん花」のワークショップを行い、どのような小さな手拭でも無駄にせず生かせる事をPRしました。また、活動の発表とb・tanぬぐい製品と学生デザインの手拭の展示販売を行い、アイディアが製品となり販売するまでを体験しました。

17 学外スタジオ&ギャラリー「co-ume lab.」東高円寺商店街にオープン

12月、東高円寺駅近くにある商店街ニコニコロードに新たな女子美の学外スタジオ&ギャラリー「co-ume lab.（コウメラボ）」がオープン。アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域日沼禎子准教授のゼミが中心となり、在学生だけでなく、国内外アーティストや地域住民の方との交流・発信の場を学外に設置。学生が自ら運営し、店舗の解体から設営、企画のプロデュースやロゴマーク制作などを行いました。今後も枠組みにとらわれない実験的な活動に取り組んでいく予定です。
ロゴマーク制作：黒川昌代（アートプロデュース表現領域4年）

20 110余年が一冊に『東京人 増刊号』発刊

「美を巡る、女性たちの闘いー女子美術大学百十余年の歴史ー」と題して、女子美創立から現在までの女子美生たちの活躍が特集された『東京人 増刊号』が11月13日より全国書店にて一斉発売されました。巻頭ページでは、女子美110余年の歴史を彩るアーティストたちの作品を紹介。さまざまな分野で活躍中の卒業生へのインタビューの他、この企画だからこそ実施可能となった座談会や対談なども掲載しています。歴史を振り返るとともに、新たな「女子美」を発見できる一冊になっています。

19 市民健康文化センターにて洋画1年生が作品展示

芸術学部美術学科洋画専攻1年生11名の作品が、相模原市立市民健康文化センターに10月から展示されています。同専攻1年生が毎年行っている取り組みで、独自の視点から描かれた作品は「私にとっての風景」をテーマに夏休み中の課題より選抜されたもの。通学路、飼っているペットの姿、一人暮らしの部屋、郷里の風景などさまざまに展開しています。また、1年生にとっては初めての学外での作品発表の場となり、作家としての貴重な一歩となりました。

15 女子美生らしいデザインが大好評！女子美×丹後アート風呂敷特別販売

10月30、31日に代官山ヒルサイドテラスにて開催されたTango Fabric Marcheで短期大学部 専攻科 造形専攻 創造デザイン（テキスタイル）の学生がデザインしたアート風呂敷が特別販売されました。これは同学生が中心となり、アート・デザイン表現学科メディア表現領域の学生と取り組んでいる「産学官連携 丹後ちりめん製品企画プロジェクト」の一環としてプロジェクトの発信と企画した商品の商品力調査を目的とし実施され、学生にとっては自身がデザインしたものが商品化され世に出るまでを実体験として学べる貴重な機会です。デザイン制作、パッケージデザインや会場での商品の見せ方等ミーティングを重ね当日を迎えました。会場は盛況で女子美生らしいデザインと一枚一枚手作業で制作したパッケージも大変好評でした。

16 イルカ先生特別講義

11月5日、本学アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域客員教授であるイルカ先生のご講義が行われました。イルカ先生は、国民的シンガーソングライターであるとともに、絵本制作、執筆、着物制作などさまざまなジャンルを越えたクリエイター、プロデューサーとして活躍されています。また、2004年7月よりIUCN国際自然保護連合の初の親善大使にご就任され、世界を飛び回っておられます。今回の講義では、イルカ先生の代表作である絵本『まあるいいのち』の朗読、新曲『We Love You Planet！～ひびけ！惑星に。』PVの上映、また翌日に行われた秋の園遊会ご出席の折にお召しになった新作着物と帯をいち早く講義中にお披露目いただくなど、多彩で、愛にあふれたイルカワールドに触れる90分となりました。

JAM 展覧会報告　PICK UP

2014/9/6(土) → 10/19(日)

女子美染織コレクション展 Part 4
「生命の樹 ―再生するいのち―」

女子美染織コレクション展Part 4では、「生命の樹―再生するいのち―」と題して生命樹をモチーフとしたエジプトのコプト織、インド更紗、日本の小袖、ヨーロッパの壁掛けなど世界各地の染織品70点を展示いたしました。生命樹は古来よりアジアをはじめ、ヨーロッパやイスラム地域などでも好まれたモチーフです。それぞれ樹種は違いますが、個々の文化を反映するシンボルツリーが表現されています。会期中の特別講演には多摩美術大学鶴岡真弓教授、グラフィックデザイナー杉浦康平氏を迎え、本学原聖教授司会進行のもと、各地で崇敬される生命の樹についてお話しいただきました。美しい染織品を通じて世界に共通する精神世界の豊かさをご堪能いただけたことと思います。

展覧会報告

JAM

造形さがみ 風っ子展　10/23(木) → 11/16(日)

毎年恒例の相模原市教育委員会主催による小中学生の作品展です。今年は第36回を迎え会期を延長し、大変多くの地域の皆様にじっくり鑑賞いただきました。

女子美ガレリアニケ

女子美スピリッツ2014 -金山桂子展-　10/17(金) → 11/5(水)

本学を卒業し、名誉教授である金山桂子先生のガラス器を描いた作品を中心に、郷里瀬戸内の風景画など13点を展示しました。

女子美術大学・長岡造形大学・東京工芸大学・多摩美術大学・中国伝媒大学
五大学合同写真展　○展

11/14(金) → 11/26(水)

本学をはじめ、長岡造形大学、東京工芸大学、多摩美術大学、中国伝媒大学、5つの大学でそれぞれに写真を学ぶ学生の写真作品を展示しました。

第8回ポスターにできること。女子美術大学×電通 人権ポスター学生作品展

12/5(金) → 12/17(水)

株式会社電通と美術大学のコラボレーション企画「人権アートプロジェクト2014」に参加した本学学生のポスターを展示しました。

展覧会予告

JAM

1/7(水) → 2/2(月)

平成26年度 退職教員記念展

平成26年度定年退職される実技系教員（上葛明広、岡田宣世）の作品をご紹介します。

3/11(水) → 3/20(金)　※会期中無休　※女子美ガレリアニケと同時開催

平成26年度 女子美術大学大学院 修士課程修了制作作品展

平成26年度大学院美術研究科修士課程修了生の展覧会です。
JAM：洋画、版画、日本画、工芸、立体造形、視覚造形、環境造形、芸術表象を専攻した学生の作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

1/16(金) → 2/4(水)

女子美術大学AP（アートプロデュース表現領域）卒業制作（南嶌ゼミ＋日沼ゼミ）プレ展示
AP Theater 2015　―AP劇場2015―

アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作のプレ展示。複数の会場を用いてAPの枠組みに囚われない自由な作品をご紹介します。

3/11(水) → 3/20(金)　※会期中無休　※JAMと同時開催

平成26年度 女子美術大学大学院 修士課程修了制作作品展

平成26年度大学院美術研究科修士課程修了生の展覧会です。
ニケ：メディアアート造形、ヒーリング造形、ファッション造形を専攻した学生の作品を展示します。

歴史資料展示室

9/4(木) → 3/15(日)

休室日：火・日・祝日、12月27日～1月6日
※3月15日特別開室

平成26年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み

収蔵資料により本学の歴史を紹介します。本展では、昭和24年（1949）新制大学「女子美術大学」発足時より1960年代までの資料を中心に展示します。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　浅野正博・林規章
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社 ヒーローズ
発行日　2015年1月5日

©2015 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp